〈興〉表現について

A Study of Arousings

薄井信治
Sinji USUI

〈興〉表現は中国古典詩に特有なものである。これは『詩経』に始まるとされており、伝統的かつ正統的な表現である。だから、ある詩人の〈興〉を調べることで、その詩人の『詩経』についての考え方や詩の伝統・正統などについての捉え方の一端を掴むことができるだろう。

〈興〉を比較するには、まず、〈興〉とはどのようなものかを明確にしておく必要がある。ところが、従来、〈興〉に関しては諸説があり、一つに定まっていない。そこで、〈興〉を通時的に比較しようとするとき、二つのやり方が考えられるわけである。一つは、比較する対象から諸説がそれぞれ〈興〉とする条件に適うものを選び出し、それぞれに対応するものを比較検討するやり方である。横山伊勢雄氏の「李賀小論――比興の手法を中心として――」はそのやり方で「離騒」の〈興〉と李賀の〈興〉を比較している。横山氏は初めに、次のように〈興〉を三つの要素に分類している。

1　事物を詠じ、その連想により主題を引き起こす働きをするもの。
2　表面はある現象をうたいながら、その表面に諷刺の喩義をこめる、諷諭の働きをするもの。
3　言外の余情を豊かにするもの。

そして、李賀と「離騒」に対して、「1」についてはどうか、「2」「3」については、という具合にそれぞれの要素を吟味していくのである。このやり方は精緻なやり方と言える。しかし、この三つの要素は本来一つの〈興〉が持ちうるものなので、別々に扱ったままでは、不都合なことになりはしないだろうか。

もう一つは、〈興〉のモデルを造っておいて、諸説のうちそれに合わないものは例外として考慮しておくというやり方である。〈興〉でないものを比較するのは意味がないが、ほんの少し違うからといって排除してしまうばかりでは通時的に比較しようがなくなるだろう。その意味でもモデルはなるべく単純なものがいいだろう。

〈興〉は『詩経』に始まるものであるから、『詩経』の〈興〉からモデルを造るのが当然である。そこで、漢の毛亨の毛伝が〈興〉を指摘した「興也」という注を調べてみる。すると、大部分が第二句末についているということが分かる。115例中102例がそうである。その他としては、第一句末3例、第三句末7例、第四句末3例となっている。また、「興也」は「東鄰」(秦風)、「南有嘉魚」(小雅南有嘉魚之什)の二つを除いたすべてのものが第一章(第一スタンザ)に置かれている。第二章(第二スタンザ)以下に〈興〉がないというのではなく、繰り返し(リフレイン)になるので注が省略されているのである。「東鄰」は第二章の、「南有嘉魚」は第三章の第二句末に「興也」がついている。

これらのことから、〈興〉は、

(1)　一首(または各章)の冒頭部にある。
(2)　一語ではなく二句程度の意味のまとまりである。

ということが言える。(1)の例外としては、章の終わりに「興也」がつくものが挙げられる。「行露」(召南)、「采葛」(王風)がそれである。第一章全部が〈興〉であり、章の冒頭部にならないが、一首全体からすれば条件に適っている。(2)で「一

語でな」いことを言うのは後に述べるように、隠喩と諷喩とを区別するためである。

〈興〉が主題を引き起こす働きを持つという説が今日では最も有力である。「〈興〉は比喩による起こしである」という定義は妥当に思われる。しかし、「引き起こす」ように見えるのは〈興〉が必ず冒頭部にあるからである。一首が統合性を持っていれば、各句はなんらかの意味で主題とかかわっているはずである。どの句も主題を引き起こすと言えないこともない。〈興〉が「引き起こす」働きを持つのは、特に冒頭部にあることと比喩の在り方によるものである。

〈興〉に用いられている比喩はいわゆる隠喩である。二句にわたるものが多いので諷喩というべきである。ここで言う諷喩は後で取り上げる諷諭とは別のものであり、現在の修辞学で言う「隠喩を連続させたもの」のことである。いわゆるアレゴリーである。

しかし、アレゴリーであれば〈興〉であるとは必ずしも言えないようだ。例えば「芣苢」(周南)、「碩鼠」(魏風)は全篇隠喩が連続しているアレゴリーであるが、毛伝に「興也」はない。注が脱落したとも考えられるが、全篇アレゴリーであるものは〈興〉ではない、と考えた方がいいだろう。つまり、草や鼠の隠喩が各章の冒頭部だけに限られていれば、それは〈興〉と言えるわけである。また、「鶏鳴」(斉風)では章全体がアレゴリーになっているが、これにも「興也」はない。そこで、〈興〉は、

(2)′　一語ではなく二句程度の隠喩のまとまりである。

(3)　隠喩の連続(諷喩)は冒頭部だけで、全篇に及ばない。

ということができる。(2)′の例外としては「興也」が注してあっても隠喩とは見なせないものが挙げられる。「北門」(邶風)を見てみよう。

北門(第一章のみ)

出自北門。憂心殷殷。〔興也〕終窶且貧。莫知我艱。已焉哉。天實為之。謂之何哉。

「興也」の後には「憂心」が具体的に述べられているので、これは隠喩ではない。第一句だけを〈興〉だと考えれば、「出自北門」が「憂心」の隠喩ということになるが、少し無理があるようである。

(3)の例外としては、全篇アレゴリーである「鴟鴞」(豳風)、章全体がアレゴリーになっている「采葛」(王風)が挙げられる。

また、(2)′(3)は隠喩の連続している部分だけを〈興〉と認めるということだから、そこから逆に「興也」の位置を改めるべきものが出てくる。例えば「終風」(邶風)、「伐木」(小雅鹿鳴之什)などがそうである。[2] 注がついている箇所を〔興也〕とし、移すべき位置を〔　〕で示す。

終風(第一章のみ)

終風且暴。〔　〕顧我則笑。〔興也〕謔浪笑敖。中心是悼。

伐木(第一章のみ)

伐木丁丁。鳥鳴嚶嚶。〔興也〕出自幽谷。遷于喬木。嚶其鳴矣。求其友聲。相彼鳥矣。猶求友聲。〔　〕矧伊人矣。不求友生。神之聽之。終和且平。

〈興〉は隠喩が全篇に連続しないために、〈興〉の部分だけが際立ってくる。そして比喻は象徴表現に近いものとなりやすく、隠喩の描写するものが実景でなくなる場合が多くなる。〈興〉が象徴性を有するのはこういう理由からだが、象徴表現であれば〈興〉であるとは言えないことも確かである。その判別にも条件(1)(2)′(3)を利用することができる。

例えば、「魚」は『詩経』において、多産・豊作・豊饒性・女性などを象徴するところが多い。そのような象徴機能を持つ「魚」を含む句が、常に〈興〉と見なすべきとは限らないのである。

敝笱(斉風)

敝笱在梁。其魚魴鰥。〔興也〕齊子歸止。其從如雲。
敝笱在梁。其魚魴鰥。齊子歸止。其從如雨。
敝笱在梁。其魚唯唯。齊子歸止。其從如水。

「笱」「梁」「魚」は女性の象徴となっている。隠喩は各章初めの二句だけなので、〈興〉である。

衡門(陳風)

衡門之下。可以棲遲。泌之洋洋。可以樂飢。
豈其食魚。必河之魴。豈其取妻。必齊之姜。
豈其食魚。必河之鯉。豈其取妻。必宋之子。

第一章の「飢」から「魚」が導かれている。魚は女性の象徴であり、「食魚」は「取妻」の隠喩となっている。「興也」はないが、第二・三章は〈興〉と見なすことができる。

魚麗（小雅鹿鳴之什）
魚麗于罶。鱨鯊。君子有酒。旨且多。
魚麗于罶。魴鱧。君子有酒。多且旨。
魚麗于罶。鰋鯉。君子有酒。旨且有。
物其多矣。維其嘉矣。物其旨矣。維其偕矣。物其有矣。維其時矣。

「罶にかかる魚」は賓客を意味するが、「鱨」「鯊」「魴」「鱧」「鰋」「鯉」は宴会の盛大さ、豊饒性を象徴していると考えられる。しかし、一章全体が宴会の描写だとすれば条件(3)に合わず、〈興〉とは考えられない。

魚藻（小雅魚藻之什）
魚在在藻。有頒其首。王在在鎬。豈樂飲酒。
魚在在藻。有莘其尾。王在在鎬。飲酒樂豈。
魚在在藻。依于其蒲。王在在鎬。有那其居。

この魚も宴会の盛大さを表しているようだが、やはり各章全体が宴会を写しているので、〈興〉ではなかろう。

比喩の在り方のもう一つの特色として素材のことがある。〈興〉の隠喩に用いられるものを分類すると、植物が45％以上を占め、次の鳥類が16％あまりとなっている。風や露などの気象も自然物に含めると、自然物ではないものは10％程度であり、それらは衣装や道具などの身の周りの自然物が用いられる。

(4)　隠喩には身の周りの自然物が用いられる。

ということが言える。植物が種類も数も多いのは、それだけ『詩経』の古代人に身近であったためであろう。

次に、古来行われてきた「〈興〉は諷諭である」という説を検討してみよう。諷諭とは「隠喩を用いた諷刺」のことである。前述した横山氏の分類では2の「表面はある現象をうたいながら、その裏面に諷刺の喩義をこめる、諷諭の働きをするもの」である。この説は梁の劉勰の『文心雕龍』以降強くなったものだが、もともと『毛詩』の詩序から始まっている。しかし、現在ではあまり支持されていない。特に、国風での〈興〉を諷諭ととる論者はほとんどいない。それは国風の諸篇には諷刺の対象となる固有名詞や固有の場面がほとんどなく、〈興〉以外の部分から全く諷刺の意が読み取れないからである。それにもかかわらず、〈興〉を諷諭とするのは毛序に「刺」しるとあるからである。毛序は、ある政治的主張を詩の序という体裁をとって述べたものであり、詩の原義とはほとんど無関係に成立したものと、今日では解されている。しかし、古来この毛序によって『詩経』を読んできたのであり、詩において諷諭を重視した論は枚挙に暇がない。〈興〉は隠喩の連続であり、象徴性が高いものなので、諷刺の意図を押しつけようとすればできないものでもない。毛序は詩全体をいうのだが、他の部分にそれらしいことがなければ、〈興〉にその役割が押しつけられるのはもっともなことである。劉勰も「何を興しようとしているのかわかりにくいので、後人の注をまって意味がはっきりするのである」と言っているが[3]、言い換えれば、〈興〉は毛序と後人の注がなければ諷諭と解釈できないわけである。

ただし、小雅には諷諭と解すべき〈興〉が多い。それは国風と違って、諷刺の対象が詩中に明らかで、詩全体を諷刺と考えざるを得ないからである。

このように、〈興〉が諷刺の機能を持つかどうかは〈興〉自体によるというよりも〈興〉によって引き起こされる後の句や主題によるものであると言うことができる。つまり、諷諭であるかどうかは〈興〉を判別する条件にはふさわしくないのである。

しかし、劉勰の影響を受けたと思われる唐代の詩人は〈興〉に強く諷諭を見ているようである。だから諷諭であるかどうかは〈興〉を比較する上で重要な要素であることは間違いない。

今まで述べたことを整理すると、

詩において、

(1) 一首（または各章）の冒頭部にある。
(2) 一語でなく二句程度の隠喩のまとまりである。
(3) 隠喩の連続（諷喩）は冒頭部に限られ、全篇に及ばない。
(4) 隠喩には身の周りの自然物が用いられる。

という条件に適えば、それは〈興〉と認められるものである。そのほかに、「〈興〉は実景でないことが多い」「〈興〉は象徴性を持ちやすい」「〈興〉は諷刺の働きをすることがある」などを付け加えても構わないだろう。

さて、これらの条件を念頭に『詩経』を検討すると、「興也」はついていなくても、〈興〉と見なすべきものが多くあることに気がつく。すでに「衡門」（陳風）を取り上げた。その他たくさんあるが、例えば「揚之水」という同じモチーフを用いた三首の詩のうち、「興也」のあるものとないものがある。それぞれ第一章を引く。

揚之水（王風）

揚之水。不流束薪。〔興也〕彼其之子。不與我戍申。懷哉懷哉。曷月予還歸哉。

揚之水（鄭風）

揚之水。不流束楚。終鮮兄弟。維予與女。無信人之言。人實迋女。

揚之水（唐風）

揚之水。白石鑿鑿。〔興也〕素衣朱襮。從子于沃。既見君子。云何不樂。

この三つを比べれば、いずれも〈興〉と見なすべきであることは明らかである。このような問題は未解決のままだが、通時的に〈興〉を比較するための判別条件としては十分活用できると思っている。

（注）

1 「中国文学研究」2（中国文学の会）

2 その他としては、「東方之日」（斉風）、「綢繆」（唐風）、「鶴鳴」（小雅鴻雁之什）、「緜」（大雅文王之什）、「振鷺」（周頌臣工之什）。

3 『文心雕龍』「比興第三十六」に「明而未融。故發注而後見也。」とある。訳文は戸田浩暁『文心雕龍　下』（明治書院）による。

（参考文献）

『十三経注疏2詩経』（藝文印書館）
高田真治『詩経（上下）』（集英社）
加納喜光『詩経（上下）』（学習研究社）
目加田誠『詩経研究』（龍溪書舎）
家井　真「『詩経』に於ける魚の「興」詞とその展開について」（「日本中国学会報」第二十七集）
周祖謨「中国古代詩歌的比興和想像」（「中国文学報」36）
藪敏裕「『毛序』成立考」（「日本中国学会報」第四十集）

（平成元年九月二十五日受理）

（宇部工業高等専門学校国語教室）